

1. 自己点検・評価の目的、方法等について

1-1:自己点検・評価の目的

自己点検・評価の目的:

AI・データサイエンス教育プログラム(通称:iDS プログラム)は、AI・データサイエンス全学プログラムの発展として位置づけられ、全学部生を対象として開講しています。このプログラムは[「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度\(応用基礎レベル\)」](#)への申請を計画しています。認定の要件において、自己点検・評価活動の実施が定められており、AI・データサイエンスセンターの組織別評価委員会での評価活動をこれに充てます。

自己点検・評価の方法:

iDS プログラムのうち、プログラムの中核を構成する以下科目を対象として自己点検・評価を実施します。

- AI・データサイエンス演習 A(1)
- AI・データサイエンス演習 A(2)
- AI・データサイエンス演習 B(1)
- AI・データサイエンス演習 B(2)
- AI・データサイエンスツール I
- AI・データサイエンスツール II
- AI・データサイエンスツール III
- AI・データサイエンスツール IV
- AI・データサイエンスツール総合

1-2:自己点検の項目と評価基準について

項目:

[「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度\(応用基礎レベル\)」](#)の創設について(2021 年3月 [数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度検討会議](#))の 2.2.1「認定教育プログラム(応用基礎レベル)」の要件(8)質保証(自己点検・評価)に掲げられている「審査の観点」に沿った項目としています。

自己点検内容:別紙資料等にある関連内容を記載しています。

評価:以下の分類に従い評価を行っています。

- S:諸活動は極めて高い水準にある
- A:諸活動は高い水準にある
- B:諸活動は高い水準に至っておらず、不十分な状況にある
- C:諸活動には重大な問題点があり、速やかな改善が求められる
- F:評価不能一判断材料等の不足により、具体的な判断ができない

2. AI・データサイエンス教育プログラム(通称:iDS プログラム)について

「iDS(Intermediate Program for Data Science and AI)プログラム」は「AI・データサイエンス演習」の受講者を対象として、AI やデータサイエンスの技術や知識を習得し、各学部の専門分野で活用する力を身につける学部横断的プログラムです。2年次から4年次の3年間のゼミ活動では、所属ゼミのテーマに沿って、データの収集・分析・考察・活用を行い、データに基づいて課題発見、解決できる力を修得します。また、演習での課題解決型学修に加えて、基幹科目として位置づけられる「AI・データサイエンスツール」と所属学部の関連科目を体系的に学ぶことで、データ活用に必要な技術や知識に磨きをかけていきます。科目内容、履修者数やアンケート結果等資料を御参照ください。

3. 資料等

1)取組概要

2)シラバス(前期、後期)

3)履修者実績

4)授業アンケート結果集計

5)授業アンケートコメント

6) 情報関連教育プログラム、AI・データサイエンス教育プログラム部門授業担当者委員会において開陳された主な意見

7) [「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度\(応用基礎\)」の創設について](#)

リンクのみ

3. AI・データサイエンス教育プログラム(通称:iDS プログラム)自己点検・評価レポート(案)

3-1:学内からの視点

No.	項目	自己点検内容	評価 (前年度)
1	プログラムの履修・修得状況、学修成果	<ul style="list-style-type: none"> ・2023年度は開設から2年目で、2年次(A)、3年次(B)の演習科目が開講された。 ・プログラム参加要件となる科目「AI・データサイエンス演習(A)(B)」の履修者は98名(2年次(A):56名、3年次(B):42名)となった。 ・本プログラム履修者数のKPIは、定員160名の70%(112名)としている。2023年度は目標を下回る結果となった。 ・プログラムは2年次から4年次の3年間の履修を要件としているため、修得者はいない。 	B (A)
2	学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度、後輩等他の学生への推奨度	<ul style="list-style-type: none"> ・科目「AI・データサイエンス演習」において、授業アンケートの質問項目「この授業の内容を理解し、知識・技能等を習得できた」の評価平均は、全体平均(前期5.6、後期5.7)と同程度(前期5.5-7.0、後期5.0-7.0)となった。 ・科目「AI・データサイエンス演習」において、授業アンケートの質問項目「学生が能動的に参加したくなるような授業であった」の評価平均は、全体平均(前期5.6、後期5.6)と比べて、同程度以上(前期5.5-7.0、後期5.7-7.0)値となった。 ・科目「AI・データサイエンス演習」において、質問項目「本科目の履修を後輩や友人に推奨しますか」(前期5.6、後期5.6)の評価平均は、同程度(前期4.7-7.0、後期4.0-6.2)となった。 	A (A)
3	全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> ・プログラム開設初年度より、全学部生を対象として開講している。 ・全ての学部生から履修がなされた。 	S (S)

3-2:学外からの視点

No.	項目	自己点検内容	評価
4	教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・2022年度から開始されたプログラムであることから、進路、活躍状況については今後対応していく。 	F (F)
5	産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	<ul style="list-style-type: none"> ・科目「AI・データサイエンス演習」では、企業との共同研究を基にした活動が3件実施されている。また公開の統計データの活用や社会調査の実施等、実データの利用を積極的におこなっている。 ・演習活動から派生した課外活動として、山口県庁(講演当時は企業との官民交流中)の方に地方公共団体でのDXやデータ活用について講演をいただいた。 ・関連科目として位置づけている「AI・データサイエンス総合」は、実務家の講義を中心とした科目で構成されており、複数の実務家の講義をうけることができている。 	S (A)

3-3: 不断の改善・進化に向けた取り組み

No.	項目	自己点検内容	評価
6	数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	<ul style="list-style-type: none"> 科目「AI・データサイエンス演習」において、授業アンケートの質問項目「この授業に対する総合的な満足度について」の評価平均は、全体平均(前期 5.6 後期 5.6)と比べて前期は同程度以上(前期 5.5-7.0)、後期は同程度(後期 5.0-7.0)となった。 授業アンケートの質問項目「この授業によって、新しい知識の習得、または、自身の能力の高まりや成長につながった」の評価平均は、全体平均(前期 5.6、後期 5.7)と比べて、前期は同程度以上(前期 6.0-7.0)、後期は同程度(後期 5.0-7.0)となった。 	A (A)
7	内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること	<ul style="list-style-type: none"> 科目「AI・データサイエンス演習」において、授業アンケートの質問項目「講義要項(シラバス)に示されていた学習目標や内容と合致していた」の評価平均は、全体平均(前期 6.0、後期 6.0)とほぼ同じ値(前期:5.0-7.0、後期 4.7-7.0)となった。 科目「AI・データサイエンス演習」において、授業アンケートの質問項目「担当教員の話し方は聞き取りやすく、理解しやすいものだった」の評価平均は、全体平均(前期 5.7、後期 5.7)と比べて前期は同程度以上(前期 5.5-7.0)、後期は同程度(後期 5.0-7.0)となった。 	A (A)
8	外部・内部環境を踏まえ、より教育効果の高まる授業内容・方法にすること	<ul style="list-style-type: none"> 科目「AI・データサイエンス演習」では、1年間の成果を学内外に公開する「iDS 成果報告会」を 2024 年2月に実施した。また学修内容に関連する実務家のゲスト講義を複数回実施した。 関連科目として位置づけている「AI・データサイエンス総合」は、実務家の講義を中心とした科目で構成されており、複数の実務家の講義をうけることができている。 プログラミング等を学修する基幹科目「AI・データサイエンスツールⅠ～Ⅳ」は、受講者のスキルに合わせた学修が可能なオンデマンド型で授業を行っている。ツールⅠとⅣは実務家が講師となっている。 	A (A)
9	全学的な履修者数・履修率向上の計画を進捗させること	<ul style="list-style-type: none"> 科目「AI・データサイエンス演習」は、遠隔授業(ハイフレックス型)にて実施し、担当教員と異なるキャンパスからの履修も可能としている。 プログラミング等を学修する基幹科目「AI・データサイエンスツールⅠ～Ⅳ」は、受講者のスキルに合わせた学修が可能なオンデマンド型で授業を行っている。 プログラムへの認知、関心を高めるため、活動の様子を公式ウェブサイトや SNS にて発信している。 	A (A)